

大学生の結婚に対する意識(1)

—性格特性の相性観について—

筑波大学大学院 (博) 心理学研究科 遠藤 公久

杉野女子大学短期大学部 山根 一郎

筑波大学心理学系 堀 洋道

Views of university students on marriage(1)

Kimihisa Endo (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*) Ichirou Yamane (*Sugino Women's Junior College, Shinagawa-Ku, Tokyo 141, Japan*) and Hiromichi Hori (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

Three hundred university students were requested to respond to a questionnaire regarding their own personality and the desirable personality of their ideal spouse in future. The main results were as follows.

- 1) The desirable personality of ideal spouse was "consideration", "immodithymia", and "methodic attitude", while that of less ideal spouse was "obedience", "neurotic", and "ego-centric".
- 2) Subjects(Ss) personality was significantly and positively related to thier ideal spouse personality in terms of "hypomania-like comformity" and "immodithymia".
- 3) "Obedience" was negatively correlated between Ss personality and their ideal spouse in future.
- 4) Regardless of Ss own personality, males rated an extraverted and considerate person as the most idealized spouse in future, on the other hand, females chose assertive and decisive person.
- 5) Females had much more difference between idealized male and real male. The difference particularly appeared among items of "neurotic" traits. Females wished ideal spouse not to be "neurotic", however males acknowledged themselves to be neurotic.

Key words : marriage, personality, spouse

目 的

われわれは、日頃よく「相性」ということを耳にする。「あの人とは相性が良い」とか「このチームとは相性が悪い」とか、何気なくそして気楽に、またいろいろな対象に対して使用している言葉の一つである。それでは、この「相性」とは一体どういうものであろうか。残念ながら、これまでの心理学はこのような領域の開拓をほとんどしていない(大村, 1988)。そこで広辞苑を繙くと、「互いに性質のよく合うこと」としている。これを対人関係に当てはめ

- 1 本研究は、故竹村研一筑波大学心理学系教授との共同研究の一環であった。
- 2 一印は反対の方向を示す。
- 3 「2. 相手に希望する性格特性」とこでの分析目的との違いは、前者は理想とする結婚相手の性格の概要を把握することであったが、後者は自己の実態評定と相手への希望評定との関連から類似性や相補性の要因を取り除き、純粋に理想化された性格特性を抽出することであった。

るとすると、相互の性質（例えば価値観や態度や性格など）の類似性の認知と深い関連があると思われる。確かに、二者間において、類似性の認知は相互の対人魅力を高め、この関係をさらに発展させる重要な要因である。Byrne (1971) をはじめとする一連の対人魅力研究は類似性仮説を支持するものであった。その意味で、「相性」にとって類似性の占める割合は大きいと言える。

それでは、類似性の他に「相性」を規定する要因はあるのだろうか。そこで問題になってくるのが「相性」をどのように捉えるかということである。一つの方法は、初対面や短期間の出会いによって生起する好き・嫌いなどの対人感情や対人魅力を規定する要因を探ることである。類似性の要因は、上記したように、ここでは重要な位置を占める。また、類似性の他にも理想性の要因もあげられるであろう。例えば芸能人に対して抱く対人感情や魅力は、自分の特性とは無関係に相手を理想化することによって生じるものであろう。また、中里・井上・田中 (1975) は、向性を取り上げ、類似性仮説の検証をしている。それによると、外向型の者は外向型の人物の対人魅力を高く評定していたが、内向型の者は、必ずしも内向型の人物の魅力を高く評定しておらず、むしろ外向型の人物のほうを魅力的であるとしていた。このことは、性格の類似性が必ずしも魅力を帰結するとは限らず、社会的望ましさの影響が介在することを示唆している。もう一つの方法は、関係の維持・発展機能を重視し、関係の長期化を支える要因を探求することである。好意をもった二人がいくら相互に類似していると認知するにしても、二人が全く同一の性質をもつということはありませんし、二者間の関係のあり方も全く変容せず同じであるとは思われない。二者間のどのような差異ならば受け入れられ、関係の長期化を阻害せずあるいは促進するかということ、は、「相性」を捉えるときに極めて重要なことである。その一つとして、相補性があげられる。Winch (1958) は、配偶者選択の際には、類似性にもまして相補性が重要であるとしている。Wagner (1975) は、友人選択の際の要求の相補性に着目し、支配要求と自律要求、養護要求と求護要求、恭順要求と顕示要求、屈従要求と攻撃要求、そして養護要求と責任要求において相補性仮説を支持する結果を得ている。また、中里ら (1975) は、女子被験者のみに求護要求と養護要求で相補性効果があるとしている。しかし、これは未知の人物への対人魅力であって、長期的な二者関係を取り上げていたわけではない。

そこで、本研究では長期的な関係が予想される結

婚に焦点をあて、配偶者選択という点から「相性」について検討する。

結婚は、友人関係や恋愛関係と同様に、親密な二者間の長期的関係の一つのあり方である。しかしながら、これまでの研究をみると、この結婚をテーマにして心理学的研究は少ない。「恋愛相手と結婚相手とは別である」といった言葉や、近年めざましく発展してきたブライダル産業などに裏打されるように、結婚を恋愛関係の単なる延長として同一次元上に捉えることは疑問である。その意味からも、心理学は、積極的に結婚にまつわる心理学的な諸問題を取り上げ、検討していくことが必要であろう。その一つとして、配偶者選択の基準といった問題は、「相性」との関連からも注目すべきテーマといえよう。

飯野・戸田 (1987) は、20・30歳代の未婚・既婚の男性と女性を対象に、未婚者と既婚者として配偶者選択などについてどのような違いがみられるか検討している。その結果、選択時の重要事項として、未婚・既婚者ともパーソナリティを重視していることを報告している。また、山根 (1972) は、大学生の結婚に対する調査を行っている。それによれば、結婚に際して相手に強く求める特性として、男女とも、性格、愛情、健康、頭の良さ、をあげている。

このように配偶者選択の要因として性格があげられ、性格の「相性」が良いか悪いかをどう認知するかが、選択時の重要な基準となるようである。そこで、この「暗黙の性格の相性観」ともいえる側面に着目し、結婚予備軍の大学生を対象に、恋愛の相手としてではなく、結婚相手としてどのような性格を望んでいるかについて、自分の性格と関連させて類似性・相補性・理想性という観点から検討することにした。

方 法

対象者：首都圏の大学生300名(筑波大学、東京工業大学、杉野女子大学から男性146名、女性154名)
 質問紙の構成：国分 (1980) を参考に、情緒的安定（神経症でないことを含む）、計画性、経済観念、主張性、決断力、実行力、社交性、リーダーシップ、協調性、許容性、誠実、固執、けじめ、清潔感、自己開示、適度な野心、適度な口数、自尊心、忍耐力、適応力の20の諸特性について、合計100の項目から成る質問紙を作成した。項目毎に「自分について」あてはまると思われる程度を「その通りだと思う」「だいたいそう思う」「あまりそうは思わない」「そうは思わない」の4件法で、また同様に「相手について」結婚相手として希望する程度を「希望する」「どちら

Table 1 質問項目とクラスター分析結果

『外向性』

4. 神経が太い。
 24. 新しい環境にすぐにはなじめない。
 56. 雰囲気ですぐにとけ込むことができる。
 58. 異性の前では自分の思うことを言えない。
 63. 見知らぬ人にも気軽に話しかけることができる。
 64. 来客の応対が苦手。
 66. グループをひっぱっていく素質がある。
 71. 異性と楽しく話すことができる。
33. 家にじっとしているのが好き。
 46. 自分と違うタイプの人とつき合っても全く気にならない。
 49. ありのままの他人を受け入れることができる。

5. お金を気前よく使う。
 28. 節約家。

『従順性』

6. みんなで何かするとき、自分の考えを通す。
 15. 人と違うものを好み、人とひと味違うことをしようとする。
 31. 他人に気兼ねして言いたいことをはっきりと言わない。
 52. 人前で話すことは嫌い。
 60. 話し上手というより聞き上手。
 79. 他人の意見に従うほうが気楽で好き。
 80. 自分の意見を主張したがるらない。
 95. あまり野心的ではない。
17. 心ならずとも他人の意見に従いやすい。
 30. 一人では判断できない。
 61. 決断力に乏しい。
 83. 物事を頼まれると断るのが苦手。

『神経質』

2. しつと深い。
 25. 自分がいつも損な役回りだと思っている。
 27. 心配症。
 37. 物事を堅苦しくとらえ、要領よく対処するのは苦手。
 44. 何か一つのことにごだわりをもっている。
 45. 自分や他人の過去を気にしやすい。
 57. 何かうまく行かなかったことがあるといつまでも気にする。
 73. 仲間以外には警戒心が強い。
 78. 他人とのいやな出来事にいつまでもこだわる。
 93. 気持ちの切り替えがすぐにできる。
18. 思い通りに事が運ばなかったときにはいさぎよくあきらめる。
 51. 周囲の人の誘惑に弱い。
 77. 他人からどう思われているかは全く気にならない。
 97. 夢中になっていても、約束の時間になればすぐにやめられる。
 99. 人前で悩んだ顔をしない。

『自己中心性』

7. 結果を考えないで物事を始める。
 39. 約束の時間に遅れ易い。
 43. 無理に人と協調するのは苦手。

26. ちょっとしたことでも大げさに話す。
 67. 運よく思わぬもうけをすと居心地が悪い。

1. 喜怒哀楽が激しい。
 3. 物事がうまくいかないときにあれこれと文句を言う。
 9. 自分の立身出世を何よりも大切にする。
 40. 自分の暮しかたを変えるのが嫌い。
 55. 常に何かイライラしている。
 82. 自分の意見通りにならないと不機嫌になる。

『他者配慮』

8. 近所付き合いが苦手。
 13. 子供が好き。
 32. 誰にでも気軽にあいさつができる。
 35. 困っている人を見ると黙ってられない。
 48. 思い立ったらすぐやらないと気がすまない。
 53. 話題が豊富。
10. 家庭内で自分がそれなりに尊重されていると思っている。
 23. 話し合いをするとき、人の意見を受け入れることができる。
 38. まわりの人間関係の安定、平和を強く望む。
 59. つき合っている相手の中に新しい面を見いだそうと努める。
 81. 素直にあやまれない。
 92. 相手の気持ちを考えた話し方を心がける。

『基本的信頼感』

19. 困っていることなどがあると隠してられない。
 47. 自分の本当の姿をさらけ出す。
 85. 人に頼られると生きがいをを感じる。
 86. 困ったときには他人に相談する。
 98. 困っていることを人に打ち明けられない。
20. ちょっとしたことでは感動しない。
 76. 他人をすぐには信用しない。
 96. 涙もろい。

『軽躁的同期性』

62. にぎやかな所が好き。
 87. 一人では何かを楽しむより仲間と一緒ににぎやかにするほうが好き。
 90. 友人とダベるのが好き。
 91. 冗談がうまい。
 94. 長電話が好き。

14. 自分のことよりも人の和を大切に。
 42. 組織の一員として働くのが好き。
 65. 仲間と協力しあって何かをすることが好き。
 72. 一匹狼でいるのが好き。

『執着気質性』

12. 一度決めたことは最後までやり通す。
 16. 粘り強く忍耐強い。
 21. 引き受けたことには全力をあげる。
 36. 宣言したことは必ず実行しようと努める。
 41. 何かを始めるとコツコツやり通す。
 50. 計画的にお金を使う。
 54. 他人に対して正直でありたいと思っている。
 70. やらなくてはならない用事でもなかなかやらない。
 100. 一つの事に熱中したら、終わりまでやめられない。

22. 約束が守れないと気になる。
 84. なかなか決心のつかない人にはがまんできない。
 88. 自分の生活は自分の努力でかなり変わらなと思っている。
 89. 良くないことをする人を見ると黙ってられない。

29. ルールや秩序を尊重し、チームワークを大切に。
 68. 自分のしてしまったことに言い訳はしない。
 69. 嫌な人の悪口を言うのは平気。

『物事への几帳面性』

11. 身の回りをきちんと整理しておかないと気がすまない。
 34. きれい好き。
 74. 物持ちがよい。
 75. 安定した職場で自分にあった仕事をするのが好き。

かといえば希望する」「あまり希望しない」「希望しない」の4件法でそれぞれ評定を求めた。

手続き：それぞれの大学での講義中に質問紙を配布し、その場で回答させた。

結果と考察

1. 自分についての性格特性

クラスター分析(斜交成分分析: oblique component analysis)により20のクラスターリングを行った結果、上記の20の諸特性について高い再現性が示された。さらに解釈しやすいようにまとめると9のクラスターを形成した(Table 1)。そこで、それぞれを『外向性』(社交性・リーダーシップ・適応力・経済観念)、『従順性』(主張性¹・決断力¹)、『神経質』(固執・けじめ)、『自己中心性』(協調性¹・情緒安定性¹)、『他者配慮』(誠実・自尊心)、『基本的信頼感』(自己開示・共感性)、『軽躁的同調性』(軽躁性・同調性)、『執着気質性』(忍耐力・計画性・実行力)、『物事への几帳面性』(清潔感)と命名した。

2. 相手について希望する性格特性

結婚相手として希望する性格特性の評定に偏りがみられるかどうかを検討するため、「相手に希望する」と「どちらかといえば希望する」を希望群とし、また「希望しない」と「あまり希望しない」を非希望群として、 χ^2 検定を行った結果、対象者全体の場合96項目に5%水準で有意差がみられた。すなわち、項目の多くの評定が希望群、あるいは非希望群のどちらかに偏っていた。これはAnderson (1968)の知見と一致し、中性的な評価の特性は少ないことを示している。ちなみに、対象者全体の場合、有意にならなかった項目は、「みんなで何かをするとき、自分の考えを通す」「人と違うものを好み、人とひと味違うことをしようとする」「組織の一員として働くのが好き」「涙もろい」の4項目であった。

また同資料について男女別に同様の検定したところ、男性では89項目が女性の場合95項目が5%水準で有意であった。希望群側に偏っていたのは、『他者配慮』、『執着気質性』、『物事への几帳面性』の項目が、非希望群側へは『従順性』、『神経質』、『自己中心性』の項目が多かった。これら傾向に性差はほとんど認められなかった。すなわち、他者に対して誠実に、また尊重する人、物事を計画的に、忍耐力をもって遂行する人、物を大切に、整理整頓のできる人、などが希望する相手の特性としてあげられた。一方、はっきり自分の意見を述べられず、決断力の乏しい人、いつまでも過去にとらわれ気分転換がで

きず、けじめの悪い人、人と協調することができず、思い通りに物事が運ばないと気分を害しやすい人、などが結婚する相手として希望しない人の特性であった。

3. 自分の性格特性と結婚相手として希望する異性の性格特性との関連

1) 類似性・相補性・理想性

自分の性格特性と希望する異性の性格特性とはど

Table 2 自分と希望する異性の性格特性との一致度が高い項目(相関係数が.50以上)

『外向性』
F33. 家にじっとしているのが好き。
M46. 自分と違うタイプの人とつき合っても全く気にならない。
F49. ありのままの他人を受け入れることができる。
『自己中心性』
* 9. 自分の立身出世を何よりも大切にする。
* 40. 自分の暮しかたを変えるのが嫌い。
* 67. 運よく思わぬもうけをすと居心地が悪い。
『他者配慮』
* 38. まわりの人間関係の安定、平和を強く望む。
F59. つき合っている相手の中に新しい面を見いだそうと努める。
『基本的信頼感』
M85. 人に頼られると生きがいをを感じる。
『軽躁的同調性』
* 42. 組織の一員として働くのが好き。
* 62. にぎやかな所が好き。
* 65. 仲間と協力しあって何かをすることが好き。
* 72. 一匹狼でいるのが好き。
* 87. 一人で何かを楽しむより仲間と一緒ににぎやかにするほうが好き。
* 90. 友人とダバるのが好き。
『執着気質性』
* 21. 引き受けたことには全力をあげる。
* 22. 約束が守れないと気になる。
* 54. 他人に対して正直でありたいと思っている。
* 69. 嫌な人の悪口を言うのは平気。
M84. なかなか決心のつかない人にはがまんできない。
* 88. 自分の生活は自分の努力でかなり変わると思っている。
M89. 良くないことをする人をみると黙っていられない。
『物事への几帳面性』
* 75. 安定した職場で自分にあった仕事をするのが好き。
* 男女ともに.50以上の項目 M 男性のみ.50以上
F 女性のみ.50以上

のような関係にあるのだろうか。双方の一致度（類似性）、相補性、理想性を調べるために、スピアマン順位相関係数を算出した。類似性を示す項目であれば、高い正の相関係数が獲られるであろうし、相補性の項目であれば、高い負の相関係数を示すであろう。そして、理想性の項目であれば、係数には有意な関連がみられず、かつ希望群（消極的には非希望群）への評定の偏向が認められるであろうと思われる。

算出の結果、.50以上の正の相関係数を示した項目は全体で23あった（Table 2）。また男女別に算出し、男女ともに.50以上の相関係数であった項目はそのうち16あった。この16項目をみると、例えば、「にぎやかなところが好き」「組織の一員として働くのが好き」などのような『軽躁的同調性』が6項目、『約束を守れないと気になる』『引き受けたことは全力をつくす』などのような『執着気質性』の項目が5項目、合計11項目を占めていた。このことは、男女とも軽躁性や同調性（いわゆる「軽やかさ」や「明るさ」）の側面、あるいは忍耐力や計画性や実行力の側面で、それぞれ自分と類似した相手を希望していたことを示唆する。

また、有意な負の相関係数がみられたのは、『従順性』の「話し上手というよりも聞き上手」の項目だけであった（ $r = -.17, p < .01$ ）。対象者が男性の場合には負の相関係数が認められたものの有意差はみられず傾向に留まった（ $r = -.14, p < .10$ ）。一方女性では1%水準で有意であった（ $r = -.21$ ）。この相補性を表す項目が、類似性の項目に較べ極めて少なく、また性差がみられることがわかった。すなわち、自

分を話し上手であると認知している女性は、男性に聞き上手であることを希望しているし、一方、聞き上手なほうであると自分を考えている女性は、話し上手な男性を希望していた。しかし、男性には女性ほど強くこのような傾向は認められなかった。

さらに、自他の評定に有意な関連がみられず、かつ希望群（または消極的には非希望群）へ偏向していた理想性³の項目として、男性では、「雰囲気すぐにとけ込むことができる」「来客の応対が苦手」「話し上手というより聞き上手」「結果を考えないで物事を始める」「近所付き合いが苦手」「話題が豊富」「計画的にお金を使う」など、『外向性』や『他者配慮』などの7項目があげられ、女性では、「来客の応対が苦手」「決断力に乏しい」「物事を頼まれると断るのが苦手」の『従順性』などの3項目があげられた。この結果から、男性は女性よりも理想性の項目が多く、また男性は積極的に希望をあげていたが、女性は消極的に消去法的に希望をあげていることがわかった。この原因の一つとして、質問紙項目の妥当性（設定のあり方）の問題も否めないところであろう。男女を合わせた対象者全体では、「来客の応対が苦手」（『外向性-I』）が唯一あげられた。以上の結果より、自分の性格特性の認知と関係なく、結婚相手に希望する性格特性として、男性は、社会的で適応力があり、自他共に尊重するような女性を、一方女性は、自己主張ができ、決断力のある男性を、それぞれ結婚相手の理想としていた。また男女とも、来客の応対が下手ではない人を理想としており、基本的に最小限な対人関係能力を相手に求めていると思われる。

Table 3-a 希望像と実態像とのズレ

男性は希望群だが、女性は非該当群			女性は希望群だが、男性は非該当群		
53. 話題が豊富 (V)			4. 神経が太い (I)		
66. グループをひっぱっていく素質がある (I)			6. みんなで何かするとき自分の考えを通す (II)		
68. 自分のしてしまったことに言い訳はしない (VIII)			19. 困っていることなどがあると隠してられない (VI)		
			47. 自分の本当の姿をさらけ出す (VI)		
			53. 話題が豊富 (V)		
			62. にぎやかな所が好き (VII)		
			63. 見知らぬ人にも気軽に話しかけることができる (I)		
			66. グループをひっぱっていく素質がある (I)		
			68. 自分のしてしまったことに言い訳はしない (VIII)		
			91. 冗談がうまい (VII)		
			97. 夢中になっていても、約束の時間になれば、すぐやめられる (III)		
I 『外向性』	II 『従順性』	III 『神経質』	IV 『自己中心性』	V 『他者配慮』	
VI 『基本的信頼感』	VII 『軽躁的同調性』	VIII 『執着気質性』	IX 『物事への几帳面性』		

Table 3-b 希望像と実態像のズレ

男性は非希望群だが、女性は該当群				女性は非希望群だが、男性は該当群	
3. 物事がうまくいかないときにあれこれと文句を言う (IV)				2. 嫉妬深い (III)	
27. 心配症 (III)				3. 物事がうまく行かないときにあれこれ文句を言う (IV)	
31. 他人に気兼ねして言いたいことをはっきりと言わない (II)				8. 近所付き合いが苦手 (V)	
51. 周囲の人の誘惑に弱い (III)				27. 心配症 (III)	
84. なかなか決心のつかない人にはがまんできない (VIII)				31. 他人に気兼ねして言いたいことをはっきりと言わない (II)	
94. 長電話が好き (VII)				44. 何か一つのことにとこだわりをもっている (III)	
				51. 周囲の人の誘惑に弱い (III)	
				57. 何かうまくいかなかったことがあるといつまでも気にする (III)	
				58. 異性の前では自分の思うことを言えない (I)	
				70. やらなくてはならない用事でもなかなかやらない (VIII)	
				78. 他人とのいやな出来事にいつまでもこだわる (III)	
				83. 物事を頼まれると断るのが苦手 (II)	
I 『外向性』	II 『従順性』	III 『神経質』	IV 『自己中心性』	V 『他者配慮』	
VI 『基本的信頼感』	VII 『軽躁の同調性』	VIII	IX 『執着気質性』	『物事への几帳面性』	

2) 希望像と実態像とのズレ

希望像と実態像とのズレをみるために、2. 同様に希望群と非希望群とに2分し、さらに自己評定も該当群(「その通りだと思う」「だいたいそう思う」と)と非該当群(「あまりそう思わない」「そうは思わない」と)に2分した。これらについて異性同士で組合せをつくり χ^2 検定をした。5%水準で有意差のみられた項目のなかから、さらに、男性で希望群と女性で非該当群、あるいは男性で非希望群と女性で該当群の頻度がそれぞれ有意に大きい項目を選出した。その結果、男性が結婚相手に対して希望している特性(希望群)でありながら、女性は自分に当てはまらない特性(非該当群)であると思っっている頻度が有意に大きかったのは3項目、また反対に女性が希望している特性であるが、男性は自分に該当しない特性であると思っっている頻度が有意に大きかったのは11項目あった(Table 3-a)。一方、男性は結婚相手として希望していない特性(非希望群)であるのに、女性は自分に該当するとしている特性(該当群)だと思っっている頻度が有意に大きかった項目は6項目、逆に女性は希望せずに、男性は該当しているとした特性は全部で12項目あった(Table 3-b)。

このように、希望像と実態像のズレ(希望群と非該当群のズレ、非希望群と該当群のズレ)は女性から男性に対するほうが、男性から女性に対するよりも大きいことがわかった。とりわけ、希望群と非該当群のズレの性差をみると、女性のほうが男性よりも不一致な項目数が有意に多かった($\chi^2=4.57$, $df=1$, $p<.05$)。すなわち、女性のほうが、男性の

実態をより理想化しているといえそうである。また、これらのズレは、それぞれ広範囲のクラスターにわたっていた。そのなかで、女性は希望していないが男性は該当するとしたズレは、特に『神経質』のクラスターに属する項目が多かった(12項目中6項目)。このことは、女性は、気持ちの切り替えができずに、いつまでもこだわるようなけじめや潔さのない男性を結婚相手として希望していなかったが、男性は現実の自分にそのような傾向があると評定していた。ここに大学生男女の理想像と実態像との乖離がみられた。

4. まとめ

本研究では、大学生を対象にした。青年後期にあたるこの大学生が果して結婚ということをどれほど真剣に、自分の問題として捉えているかどうかは確かに疑問である。その意味から、本来、より広範囲にわたる調査対象者が求められるべきであろう。しかしながら、大学生には大学生なりの結婚観なり、相性観なりがあるに違いない。それが、適齢期の者とは多少とも異なるにせよ、大学生なりの捉え方の実態を探究することは無意味であるとは思われないのである。

今回は性格特性だけを取り上げて、「暗黙の相性観」ともいえるものを探索的に研究したが、今後の課題として、①さらに役割意識などを取り上げ、相性観との関連を検討すること、②前述したように、より現実性を高めるために調査対象者をさらに広げること、③関係の長期化を促進・抑制する要因とし

て、相性観はどのような機能を果たすのか、さらに婚前と婚後では相性観はどのように変容していくのか、などを検討すること、である。

引用文献

- Anderson, N. H. 1968 Likableness ratings of 555 personality-trait words. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 272-279.
- Byrne, D. 1971 *The attraction paradigm*. Academic Press.
- 飯野晴美・戸田弘二 1987 結婚と離婚―1― 日本心理学会第51回大会 648.
- 国分康孝 1980 結婚の心理 福村書店
- 中里浩明・井上 徹・田中国夫 1975 人格類似性と対人魅力―向性と欲求の次元― 心理学研究, 46, 109-117.
- 大村政男 1988 相性 青年心理 68 金子書房
- Wagner, R.V. 1975 Complementary needs, role expectations, interpersonal attraction, and the stability of working relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 116-124.
- Winch, R.F. 1958 *Mate-selection: A study of complementary needs*. Harper.
- 山根 薫 1979 青少年心理学 めいけい出版
—1989. 9.30受稿—